

## ヘーゲル『大論理学』『定在』章の構造転換

松岡健一郎

### 序論——問題の所在と課題

ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) <sup>(1)</sup> の『大論理学』、第一巻「存在」論は一八二二年に出版された。この初版は、のちに大幅に改訂されることになる。だがその改訂作業は、ヘーゲル自身の死（一八三一年一月一日）により第一巻「存在」論だけで途絶する。この改訂された「存在」論は、ヘーゲルの死後（一八三二年）出版される。

「存在」論、第一章「存在」の本論は、初版でも第二版でも同じように、まだまったく規定されていない純粋な存在から始まる。そのような純粋な存在は、純粋な無と同じものであるとされ、さらには生成がそのような相互に無媒介的な存在と無とを統一していると考えられる。この無媒介的統一性の最初の形態が、「定在 (Daseyn)」だとされる。

「定在」章のあとには「対自存在 (Fürsichseyn)」章が続く。ヘンリッヒは、この「対自存在」章で早くも反省や測定などの「反省の論理」に特徴的な用語が現れていると指摘したうえで、但し「本質」論以前のその段階ではまだ「反省の論理」が不完全にしか機能していないと論じている。<sup>(2)</sup> しかし、逆にも言えるのではないだろうか。すなわち、「反省の論理」に基づいて論理的規定が展開する「本質」論以前にも、つまり「存在」論において既に、「本質」論と

は異なっているにせよ反省の論理が機能し始めているとも見る事ができるはずである。つまり、ヘーゲル論理学において知のはたらきが自らを当該の知それ自身によつて対象とするということが、既に「対自存在」章では起こっているはずなのである。そのように対自存在という論理のカテゴリーのもとで知の対自化が可能になるまでには、どのような論理的規定が示されねばならないのか。この問題を説明するためには、「対自存在」章につながる「定在」章において如何なる論理的規定が準備されていたのかを究明することが不可欠である。

だが、その「定在」章は『大論理学』の初版と第二版とは大きく異なっている。ヘーゲルが「定在」章を改訂したことについては、それを改悪<sup>(3)</sup>とする解釈もある。この異同問題は、近年までヘーゲル論理学研究の分野であまり活発に議論されてこなかった<sup>(4)</sup>。それゆえまだ確定した評価があるわけではない。だからこそ、用語法の微妙な変化や叙述の順序などの細かい違いを些末な事柄<sup>(5)</sup>として看過してしまわないよう、慎重に検討することが必要なのである。

私は、本稿で以下検証してゆく通り、『大論理学』の特に「定在」章に施された改訂が、定在という論理のカテゴリーの構造的変化を意味するものであると考える。紙幅の制約により本稿では、改訂を経た第二版においては定在の領域が、論理的規定のはたらきそれ自身の自己反省<sup>(5)</sup>が成し遂げられる場所となっていることを中心に考察したい。

# 1. 定在の「第一次的」規定に現れている両版の相違

初版と第二版は同じように、「定在」章を次の一文で始めている。すなわち、「定在は、規定された存在である<sup>(6)</sup>」。定在とは、被规定的な（つまり、存在一般ではなく何らかの規定を帯びた一定の）存在のことである。これから考察

される目下の論理のカテゴリー、定在は、存在と無とをモメント（契機）にして成り立っていると規定されている。但し、今のところ、まだ定在の両モメントは互いに他方と媒介されておらず、それぞれ直接的に想定されているだけである。それゆえに、まだ「定在は、存在と無との単純な一体的存在（*Einsein*）である」<sup>(7)</sup>としか規定され得ない。だが、この媒介の欠如がその後にく諸規定を展開してゆくための駆動力、規定を進展させるバネのはたらきをなすことにもなるのである。

目下の定在は、存在と無とをモメントにして成り立っているが、それら両モメントは媒介を欠いたままで（つまり「単純な」一体化によってのみ）定在を構成しているに過ぎない。ここまでは初版と第二版は、同じである。

ところが、第二版のヘーゲルは次のようにも述べる。「具体的な全体が存在の形式においてある、つまり直接性という形式においてあるというふうにして、非存在が存在のうちに取り入れられると、非存在は被規定性、そのものを形成する」<sup>(8)</sup>。非存在が存在との関係という文脈で考察されるとき、非存在と言ってもそれは、その相互関係のもとでもはや単なる空虚な無を意味するものではない。ヘーゲルはこの引用文に近い箇所でも、そもそも非存在という名称がすでに存在という語を含んでいるのだから、非存在は存在に関係づけられているのだとも述べている。<sup>(9)</sup>だが、その存在と非存在との関係なるものには、目下の規定からすれば、まだ具体性などないはずである。言い換えれば、この引用文の前半で言われているような、定在を「具体的な全体」という相のもとに捉え得ることは、もっと後になって（定在についての規定のさらなる展開を経て）からでなければ可能ではないはずなのである。

第二版のヘーゲルは、この問題について次のように説明している。すなわち、「全体なるものは、我々にとつて、我々の反省においてありはするが、まだそれ自身に即して措定されているのではない」<sup>(10)</sup>。ここでヘーゲルは、観点を区別する必要性を主張しているのである。つまり、「我々にとつて、我々の反省において」という観点から明らかで

あることは、「事柄そのものの進展のモメントであるものから区別されるべきである」というのである。<sup>(12)</sup>「我々の反省」は、帰結を既に見抜いている「我々にとつて」という観点から考察する知のはたらきであり、それは当該カテゴリーに即した内在的な展開からすれば外的であるから「外的反省」<sup>(13)</sup>とも呼ばれている。ヘーゲルによれば、「事柄そのものに即して明らかにされねばならないものを先取りする」この反省は、なるほど「見通しを容易にし、それゆえ理解を軽減するのに役立つ」が、しかし「これからのことに対しての、不当な主張、不当な根拠や基礎であるかのような外観を呈するという不都合を伴う」<sup>(14)</sup>。だから、今はまだ「我々にとつて、我々の反省において」という観点があつてこそ捉えることのできる事柄は、差し当たりは「そう反省されるべきであるところのもの以上のものと受け取られるべきではない」<sup>(15)</sup>とされている。

この箇所から明らかであるように第二版では（初版とは異なつて）、定在についての最初の規定において、当該の規定そのものに即した（それゆえ、まだなお未発達な）知のはたらきが想定されているだけでなく、そのような知のはたらきとは区別されるべきもうひとつの知のはたらき、規定の帰結を先取りして捉えている「我々の反省」までもが最初から示唆されているのである。

このことは、初版と第二版が定在の第一次的規定をどのようなものと見做しているかの相違に対応している。初版が定在に与える最初の規定は、「存在」章の帰結である生成と直結している。定在は存在と無という二つの規定をモメントにして成り立っているが、差し当たりそれら両モメントが、まだなお無媒介的にのみ併存しているに過ぎないと規定される。初版の場合に定在の第一次的な規定をなしているのは、定在の両モメントの相互に無媒介的ないし直接的である関係であり、言い換えれば、他方への関係づけを自らに即して顕在化していない一面的な関わりである。それゆえ、他方を含めた全体から見る視点のもとで改めて捉える反省がまだ欠けており、目下のところは定在の両モ

メントの相互的な無媒介性が示されているに過ぎない。

ところが、第二版になると、定在を「具体的」にさえも示す観点からの規定が最初から前提されている。定在を具体的に示すそのような規定は、諸々のカテゴリーの展開を経てようやく可能になるはずであるのに、それが「我々の反省」によって先取りされているのである。従って、第二版の場合では、相互にまだ無媒介である定在の両モメントに即した論理的規定のはたらきによってのみならず、さらに、定在に帰し得る諸規定すべてを元から前提し且つ定在を具体的全体という相のもとに捉える知のはたらきによってさえも、定在の第一次的規定がなされているのである。

「定在」章冒頭で示される、定在の第一次的な規定は初版と第二版とは明らかに異なっている。この冒頭部分の相違は、「定在」章の最後に示される論理的規定である無限性にも反映されることになる。

## 2. “無限なもの”の逆戻り”とその帰結

ヘーゲルは『大論理学』の初版でも第二版でも、「定在」章の最後に「無限性」という論理的カテゴリーを置いている。初版では「(質的)無限性」、第二版では「無限性」と題されている「定在」章最終節では、無限性の概念が示され、且つ無限性の概念のもとで定在に最後の規定がなされる。ヘーゲルは、初版でも第二版でもこの節の冒頭で、無限性と絶対者とを同一の水準で捉えている。無限なものは、絶対者の「第二の定義」<sup>(16)</sup>ないしは「新たな定義」<sup>(17)</sup>だとされる。さらにヘーゲルは、無限性という論理的カテゴリーに至るまでの運動を捉え直している。その際ヘーゲルは、「我々」による外的観点から無限性の構造を明らかにするのみならず、有限なものそれ自身の運動に即しても、同じ無限性の構造を明らかにしようとする。

ヘーゲルが初版でも第二版でも同じように主張しているように、無限性は有限なものの運動を離れて示されるわけではないし、有限なものの運動から遮断されたものでもない。すなわち、有限なもの自身が「自分を越えてゆくこと、そして否定を否定すること、そして無限になること、このことが一般に、有限なもののそのものをもつ本性なのである。それゆえ、無限なものが、それだけで確固たるものとして、有限なものを越え、<sup>(18)</sup> 上部に立つのではなく、それだからまた、有限なものが無限なものの外部あるいは下方に自分の存続を有し保つわけでもない」<sup>(19)</sup>。だから、一方的に「我々が単に主観的理性としてのみ、有限なものを越えて無限なものへと出てゆくのではない」<sup>(20)</sup> であり、そんなことをすれば有限なものから無限なものへの高まりが「有限なものにはまったくお構いなしに起こる」<sup>(20)</sup> ことになってしまう。本来は、「有限なものそれ自身が無限性へと高められる」<sup>(21)</sup> 際に、その有限なものから無限なものへの上昇は、決して有限なものにとって異他的な外圧、「フレムトな暴力」<sup>(22)</sup> によって外的になされるのではない。『大論理学』以前の一八〇四／〇五年に書かれた所謂「イエーナ論理学」で既にそうヘーゲルが論じていたように、<sup>(23)</sup> 『大論理学』の無限性論でも、無限性は目下問題となっている（まだなお有限であるような）当該の事柄そのものに即して、言い換えれば、有限なものを起点にしてなされる規定によって、その有限なものの自身が無限なものになるようにして捉えられなければならない。

一般にヘーゲル論理学において、無限性の概念のもとでは、有限なものと無限なものによって構成される全体がある論理構造と、その全体を構成する諸部分がそれぞれに有する論理構造とが、同じものであることが解明される。但し、そのように全体と諸部分とのフラクタルな関係構造（入れ子構造）を表す無限性の概念が、最初から十全なものとして一挙に示されるわけではない。

無限なものの概念は、粗悪な無限性、“悪無限”の概念に照らし合わせて検証される。悪無限は、有限なものに対

立し続ける無限なもの、無限なものに對立し続ける無限なものとの關係として、それゆえ統一を際限なく先延ばしにする無限進行として、示される。<sup>24)</sup>だが、まさしくここで、『大論理学』の初版と第二版は、それぞれ別の道をとる。ヘーゲルが本当に無限なものだと見做す真無限は、『大論理学』の初版と第二版とは異なつた仕方では示されるのである。以下、両版の相違を検討する。

まず、初版について検討する。当初、無限なもの、まだ単に有限なもの否定という意味しかもっていない。その無限なものは、他なるものとしての有限なものを否定しているのである。この無限なものは、他なるものとしての有限なものとの關係においてのみ、無限なものとして成り立っているに過ぎない。この場合には「有限なものは、まだ本当には止揚されているわけではなく、無限なものに對立したままに留まっている。同じように無限なものも、自身のなかで有限なものを本当には止揚したわけではなく、有限なものを自分の外部にもっているのである」<sup>25)</sup>。ここで示されているのは、無限なものとの外的な關係にほかならない。

悪無限という規定が登場するのも、無限なものとの外的關係が明るみに出されるこの箇所なのである。すなわち、「無限なものがそう措定されるなら、それは悪無限的なもの、もしくは悟性の無限なものである。そのような無限なものは、否定の否定ではないのであつて、そのような無限なものは、單純な否定、最初の否定へと格下げされる。それは、實在的なものであるような有限なもの、無なのである。つまり、そういう無限なものは空虚なものであるし、定在からすれば規定を欠いた向こう側、没规定的彼岸なのである」<sup>26)</sup>。悪無限として捉えられた無限なもの、有限なものを否定するが、しかしこの有限なものが同時にまた實在的なものだとされているので、これを否定することは無限なものの自身が定在の領域での實在性を自ら喪失することでもある。こうして、無限性に至るまでの論理的規定の歩みが「逆戻り」してしまい、無限性が（無限性以前の）低次な論理的規定へと「格下げされる」

という事態が起こる。

初版によれば、有限なもの彼岸としての「この無限なものは、端緒において無として存在に対立していたのと同じ空虚な抽象である」<sup>(27)</sup>。初版では、無限なもの逆戻りは、「空虚な抽象」である。初版のヘーゲルによれば、端緒において（つまり定在以前の「存在」章での）無は「無媒介的な無であったが、しかし、ここでは無は定在から帰り且つ定在から出てゆく無であり、それは単なる無媒介的な否定としてだけ定在に關係するのである」<sup>(28)</sup>。初版における無限なもの逆戻りは、端緒にそうだったのと同様な（つまり「存在」章で存在と無との關係がそうだった）単なる「無媒介的な否定」に過ぎない關係を、またもや繰り返してしまうことによって定在の規定がなされることを意味している。

だが、本来ならば無限なものとは有限なものとの「双方は互いに外部にあるが、しかしそれらの本性に従って互いに端的に關係づけられている。∴（略）∴双方の統一性はそれらのもとに措定された關係ではない」<sup>(29)</sup>。無限なものとは有限なものは、本当は相互關係の相のもとに示されるべきなのだが、しかし無限なものとは、それらの本性による關係、本来示されるべき相互關係は「それぞれのもとに措定された關係」とは異なったままである。つまり、無限なものとは有限なものとの双方が単に交互的に現れるに過ぎないので、本来そこに顯在的に示されるべき統一性が全体としては體現されていても、しかし、その全体から見た場合にならばそこに示されているべき關係が、言い換えれば相互關係に基づいて示されるべき統一性が、まだ双方に即した形で示されていないのである。そこで本来示されるべき統一性は、まだ外的に、双方どちらからも対自化されないままで現れているに過ぎない。

初版の「（質的）無限性」節の第三項は、「無限性の自己還帰（Rückkehr der Unendlichkeit in sich）」と題されている。その末尾では次のように述べられている。すなわち、「他なるものによってではなく自身のうちで規定されたこ



の純粹な存在、質的無限性、否定的な自己関係として自己自身に等しい存在は、対自在である<sup>(31)</sup>。つまり、初版が本当の無限性、真無限だと見做すのは、定在の領域で示される論理的規定の運動に本質的に存する、否定的な自己関係にはかならない。定在の第一次の規定において定在が有していた無媒介性は、無限性のもとで今や否定的自己関係として顕在化されたのである。初版の場合、こうして否定的に示された真無限という論理的規定が、さらに対自在と言い換えられ、対自在の領域ではじめて単に否定的であるだけではない肯定的なものとしても示される。定在の領域でそうだったのとは違って、対自在のもとでは、「存在している当のものと、その当のものがそれにとつて存在しているところのそれとが同一である<sup>(32)</sup>」とされる。

初版の場合、真無限を実際には（無自覚的、潜在的であるにせよ）表現している悪無限は、既に判明している無限性の概念を単に不完全な仕方で表すものに過ぎない。初版の「無限なもの逆戻り」は、「定在」章冒頭の無媒介的規定への逆戻りであるに過ぎず、それゆえ定在について十分な規定をなすものではないので、肯定的な意義をもたない。つまり、初版の場合に悪無限というのは、真無限を提示するための必要条件ではないのである。第三項で無限なものとの有限なものとの双方からの否定を二重否定として示すための条件は、依然相互に外的であるような有限なものとの無限なものとの双方が潜在的に基づいている依存関係であり、それは既に第一項で示されている。従って、第二項で改めて無限なものとの有限なものとの外的関係を悪無限ないし無限進行として展開してみせることが第三項に至るために必ずしも必要であるわけではない。

この点は、悪無限の運動が真無限を示すために不可欠となる第二版の場合とは異なる。第二版では「定在」章、「無限性」節、悪無限のもとで（従って、対自在という論理的カテゴリーにまで到達する以前の、定在の領域でもう既に）定在が自己自身を自らに対して示す自己言及的運動、対自化の運動が示される。つまり、ヘーゲルは初版の

「対自存在」の内容を第二版では「定在」章へと前倒しして扱っているのである。<sup>83)</sup>

次に、第二版の無限性論について検討する。

第二版の場合でもヘーゲルの論述は、無限なもの<sup>34)</sup>の当初単純な規定を悪無限という規定へ導いてゆく。しかし第二版では、無限なもの<sup>34)</sup>の逆戻りは単純には無限なもの<sup>34)</sup>の悪しき「格下げ」であるだけではない。第二版では「無限なもの<sup>34)</sup>は、規定されたもの一般としてのエトヴァスというカテゴリーへと逆戻りしている。もっと詳しく言えば、無限なもの<sup>34)</sup>は、被規定性一般を止揚する作用を介して帰結する、自己内反省された定在であり、従って無限なもの<sup>34)</sup>は、自分の被規定性から区別された定在として措定されているのだから、——限界を伴うエトヴァスというカテゴリーへと逆戻りしてしまっている」<sup>83)</sup>とされる。この引用箇所<sup>83)</sup>で明言されている通り、第二版の場合、無限なもの<sup>34)</sup>は、或るものを意味する論理のカテゴリー、「エトヴァス」へと逆戻りするとされている。このエトヴァスが、第二版の場合では自己還帰した定在という意味をはじめからもっているのである。

エトヴァスへと逆戻りした無限なもの<sup>34)</sup>は、さらに次のようにも規定される。すなわち、「無限なもの<sup>34)</sup>の無媒介的存在は、無限なもの<sup>34)</sup>の否定性<sup>34)</sup>の存在を、つまり当初は無限なもの<sup>34)</sup>のなかで消えたように仮象した(schien)有限なもの<sup>34)</sup>の存在を、再び呼び起こす」<sup>83)</sup>。この箇所によれば、無限なもの<sup>34)</sup>がなおも無媒介性をとどめていることによって、一度は「無限なもの<sup>34)</sup>のなかで消えた」ように見えた有限なもの<sup>34)</sup>の存在が、再び出現するとされている。従って、無限なもの<sup>34)</sup>は(その外部にではなく)それ自身のうちに、有限なもの<sup>34)</sup>を「再び」呼び起こすのである。こうして第二版では、無限なもの<sup>34)</sup>の逆戻りは、無限なもの<sup>34)</sup>のそれ自身に内在する規定によって行われるのであり、無限なもの<sup>34)</sup>のそれ自身の内的運動の叙述として示される。

第二版でも、有限なもの<sup>34)</sup>に対立し続ける無限なもの<sup>34)</sup>は悪無限と呼ばれ、その際、無限なもの<sup>34)</sup>は有限なもの<sup>34)</sup>の彼岸だ

とされている。この点だけを見れば初版と同じだが、しかし第二版では、自己還帰した定在という意味をもつエトヴァス<sup>37)</sup>が、同じ資質をもつ他のエトヴァスとが並存する相関関係が悪無限をなしており、そこではもはや初版の場合のように二つの単純関係が単に無媒介的に並置されているだけではない。

第二版は、「悪無限、もしくは悟性の無限なもの」が次のように現れると規定する。すなわち、「悟性にとっては、この無限なものが最高の真理として、絶対的な真理として妥当する。悟性が真理との和解において満足に達したと思いついてしまっている限りでは、和解されざる解消されざる絶対的な矛盾のうちにある」<sup>38)</sup>。この引用文にあるように、本来同じ事態であるものが、我々が「我々の反省」の観点に立つて外部から「悟性」の営為を考察すれば、なるほどそこに「絶対的な矛盾」が見出されるのだとしても、しかし、このことを悟性の観点から、自己還帰している定在であるエトヴァスに即して考察すれば、「悟性にとっては」絶対的な矛盾などではなく却って「絶対的な真理」が見出されることになる。

ここでは同じ一つの事柄について、まったく反対の帰結に至るような観点の相違が示されているのは明らかである。ここで示されたこの観点の相違こそは、無限なもの存在が有する無媒介に端を発するものである。今や、一方には自己還帰している定在同士の間に成り立つ相互関係を見据えて、この相関関係の相のもとに事柄を捉えようとする反省、「我々の反省」が、そして他方には、目下の事柄をそれ自身に即して捉え得ようとする悟性の観点に即した反省との、二つの様式の異なる反省運動が現れているのである。

第二版のヘーゲルは、真無限を論じる「無限性」節第三項<sup>39)</sup>になると、無限なものとは有限なものとの「関係」に基づいて対立の止揚を説明するだけでなく、それぞれを単独で切り離して固有の存立を認め、当該の事柄だけに即しても考察している。そして、どちらの場合でも、無限なものとは有限なものとの双方が自らを止揚するという同一の帰結に

至ると結論づけている。すなわち、「双方の考察様式のうち、第一の考察様式は、無限なものとは有限なものとの出発点を、どちらもが互いに (aufeinander) 他方へ関係する双方の関係 (Beziehung) として見做すはずのもので、第二の考察様式は、双方を互いに (voneinander) 完全に切り離しておくはずのものだから、双方の考察様式は、当初は異なる出発点をもっているように見えるが、しかし同一の帰結を与えるのである」<sup>(40)</sup>。第一の考察様式は、無限なものとは有限なものとの「関係」に着目し、双方の間を結ぶ関係、相互関係に基づいて双方の媒介を図るものである。そこでヘーゲルは、双方の「関係」について、外在的であるように見えるかもしれないが本当は双方にとって本質的なのだと指摘する。すなわち、「無限なものとは有限なものとの双方相互の関係は、双方にとって外的なようであっても、しかし両者にとって本質的なものであり、この関係づけなしには、どちらもがそれのそれであるところのものではない」<sup>(41)</sup>。この、当該の事柄に即した見方をする限りで外的であるように見える関係は、本当は当該の事柄に即してさえも本質的なものであり、その本質を「我々の反省」は見抜いているのである。ところが「我々の反省」とは異なつて、無限なものとは有限なものとの「関係」を俯瞰的には捉え得ない第二の考察様式は、無限なものとは有限なものとは「互いに完全に切り離して」、それぞれにはたらく内在的な規定を捉えようとする知の運動様式のことを指しているのである。

無限なものとは有限なものとのそれぞれは、他方を介して自己自身へと還帰することによって、他方へと向かう規定をそれ自身のうちへと反映して自己還帰のない自己言及的になることによって、他方から自らを切り離すことになるが、しかし「双方はまた、まさに双方を切り離す否定性によって、本質的には互いに関係づけられるのである。双方を、すなわちそれ自身のうちへ反省した二つのエトヴァスを、関係づけるこの否定性とは、一方が他方に対立してもつ対抗的な限界である。詳しく言えば、双方のどちらもが限界を、ただ単に他方に対立させて自分のほうに」<sup>(42)</sup>

him) もつだけでなく、むしろ、それぞれにとって、否定性が即、自存在なのであり、つまり双方どちらもがそのように、自分自身に即して (an ihm selbst)、それ自身で (für sich)、自分が他方からの自分の切り離しを行うことにおいて、限界をもつのである<sup>(42)</sup>。当該の事柄に即した反省とは、「それ自身のうちへ反省した二つのエトヴァス」が自立的になり、そして他方への否定性を顕在化することにはかならず、そのように双方が自立化し他方から自らを切り離すことこそが、それら「それ自身のうちへと反省した二つのエトヴァス」の間に成り立つ相關関係を成り立たせるものでもある。つまり、無限なものとは有限なものとをそれぞれの排他的な自己還帰によって「切り離す」はたらかが、同時にまた、本当は依存し合っている両者の「関係づけ」でもあるとされているのである。

第二版のヘーゲルは、これら二つ論理的規定の運動が「同一の帰結」に至るとも述べている。「そこに存するのは、双方において同じ否定の否定である<sup>(43)</sup>」、とヘーゲルは言う。双方の考察様式は、排他的に自立化することによって他方への否定性をもつが、しかし、この否定性こそが「無限なものの無媒介的存在」に端を発する、知の二重化運動の効果なのである。

無限なものについて最初に得られた単純な概念は、単に見かけだけ自己完結的存在であつた無限なものを捉えた概念に過ぎず、そこになおも存する無媒介性が、無限なものの逆戻りを起こすことになる。だが、その逆戻りによってこそ、二通りの自己還帰的な考察様式が無限なものの中で現れる。こうして、無限なもの内部で定在の自己相対化の運動が顕在化されるのである。これら二つの知の運動こそが、定在の領域を一方では「我々の反省」の観点から捉え、また他方では当該の事柄それぞれに即して自己内反省の観点から捉える、二つの反省運動にほかならない。

## 結 論

『大論理学』「定在」章の大幅な改訂は、章の内容のみならず叙述方法にも及ぶ構造的な変化である。第二版のヘーゲルは、「事柄それ自身に即した反省」と「我々の反省」という二つの異なる知のはたらきが、どのようにして（対自存在という論理的カテゴリーに至る以前に）定在の領域内部で二重化して現れるのかを、「無限なもの逆戻り」に基づいて説明している。

初版の場合、定在という論理的カテゴリーに本質的に含まれる否定的自己関係が、無限性の概念のもとで示される。定在の領域においては関係項と被関係項との双方が否定的であることによって、定在は二重否定の構造を有する。しかし、この二重否定が「否定の否定」として肯定的な規定として示されるのは、初版の場合では、定在よりも高次な論理的カテゴリーである対自存在のもとでのことである。定在がその第一次の規定として有していた定在を構成する両モメントの無媒介性を定在自身の二重否定として顕在化することは、定在の領域のうちで定在に即した規定によってだけでは十分ではなく、定在について「否定の否定」のはたらきを見抜いている「我々」の観点からなされる規定が不可欠である。

改訂を経た第二版の場合、無限なもの逆戻りは、もはや無限性概念の不十分な把握によるものとしてではなく、無限なもの存在そのものが有する無媒介性に起因して必然的に生じるものとして示される。先行カテゴリーへの逆戻りは、先行カテゴリーに再度目を向けることを可能にするという肯定的な意味をもつ。無限なもの逆戻りによってこそ、無限性に向かって上昇する観点からのみならず、その上昇する知のはたらきを反省する観点からも、双方向

的に論理的規定がなされるのである。無限なもの内部で展開される二つの知のはたらきは、相互に自らを他方から切り離す否定性をもつが、しかしこうしてその否定性を定在という論理のカテゴリーの内部で顕在化させることこそが、「否定の否定」を定在に内在的な仕方であり且つ定在自身によって示すことにほかならない。また、そのように「否定の否定」を示すことこそが、定在のうちではたらく知をその知自身へと向けるといふことなのであり、定在それ自身が有する自己解明的な知のはたらきにはかならないのである。

ヘーゲルの『大論理学』改訂は、定在のもとに自己解明的、反省的構造が存することを明らかにしている点で、初版よりもさらなる前進をなしたものであり、この意義が看過されてはならない。

註

- (1) 以下、ヘーゲルのテキストからの引用はすべて次の全集に拠り、GWの略号、巻数、ページの順に示す。G. W. F. Hegel, *Gesammelte Werke. In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften*, Hamburg 1968 ff.
- (2) Vgl. Dieter Henrich, *Hegels Logik der Reflexion, in Hegel im Kontext*, Frankfurt am Main 2010 (Neuauflage), S.105 ff., insbesondere S.147 f. (Anm.14.).
- (3) 初版『大論理学』を翻訳した寺沢恒信はその代表的な論者であり、改訂をヘーゲルの「老化現象」(『ヘーゲル 大論理学 1』寺沢恒信訳、以文社、一九七七年、五五二頁)によるものとまで言っており、特に「定在」章については初版に「整然とした論理的展開」があったのに対して、第二版については「一言をもつていえば、これは見るも無惨なつぎはぎ細工である」(同書、五二二頁)と切り捨てている。
- (4) 勿論、『大論理学』両版の異動問題がまったく扱われなかったわけではない。Vgl. Hermann Schnitz, *Hegels Logik*, Bonn 2007, S.314–25.
- (5) ヘーゲル論理学において、「存在」論の領域は、まだ「本質」論とは異なつて) 反省の論理によつてではなく、移行の論

理によって進展するとされている。私は、前掲のヘンリッヒの有名な論文とは別の観点から、つまり『大論理学』の改訂によって生じたテキストの異同に基づきながら、どのように「本質」論以前に「存在」論で反省の運動が生じるかを示したいと思う。

- (6) GW 11-59, GW 21-96.
- (7) GW 11-59, GW 21-97. 但し、第二版では「単純な」に強調がない。
- (8) GW 21-97.
- (9) Vgl. GW 11-45, GW 21-70.
- (10) GW 21-97.
- (11) GW 21-97.
- (12) GW 21-98.
- (13) GW 21-97.
- (14) GW 21-97 f.
- (15) GW 21-98.
- (16) GW 11-78.
- (17) GW 21-124.
- (18) GW 11-79, GW 21-125.
- (19) GW 11-79, GW 21-125.
- (20) GW 11-79. 第二版にもほぼ表現がある。第二版では、「人は、このことを有限なものにはまったく構いなしに起こるようにいつなるようになる」(GW 21-125.)となっている。
- (21) GW 11-79, GW 21-125.
- (22) GW 11-79, GW 21-125.
- (23) 「イエーナ論理学」でも、「無限性」という論理のカテゴリーが十分適切に示されるためには、事柄そのものに直接結びついて進む「悟性の論理学」と、それに対しては外的であるような「我々の反省」という、異なる二つの知のはたらき（ないしは反省様式）が統一されていることが必要であった。



- (24) 拙稿、「ヘーゲル論理学における「悪無限」批判の諸相」、日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』第16号所収、こぶし書房、二〇一〇年、一三九―一五一頁参照。
- (25) GW 11-79.
- (26) GW 11-79 f..
- (27) GW 11-80.
- (28) GW 11-80.
- (29) GW 11-80.
- (30) GW 11-82.
- (31) GW 11-83.
- (32) GW 11-88.
- (33) 具体例を挙げれば、初版では「対自存在」章で扱われる論理的カテゴリー「観念性」の内容は、第二版の「定在」章「無限性」節で論じられ、しかも第二版の「対自存在」章からは「観念性」という項そのものが消えている。ヘーゲル論理学における観念性の意味については、安井邦夫、「弁証法とイデアルな構造」、加藤尚武、安井邦夫、中岡成文編『ヘーゲル哲学の現在』所収、世界思想社、一九八八年、一七四―一九一頁を参照。
- (34) Vgl. GW 21-126 f..
- (35) GW 21-126.
- (36) GW 21-126.
- (37) 第二版の「無限性」節は、「本質」論で示される反省規定、特に「矛盾」という反省規定の内容を先取りして表している。この点については拙稿、「ヘーゲル『大論理学』における「無限性」と「矛盾」との循環」、関西哲学会編『アルケー』第19号所収、一八一―一九〇頁を参照。
- (38) GW 21-127.
- (39) ヘーゲルは第三項を「肯定的な無限性 (Die affirmative Unendlichkeit) (GW 21-131) と改題している。ヘーゲルは「肯定的な」規定を示そうとしているのであり、このことは表題からしても明白である。
- (40) GW 21-131 f..

(43) (42) (41)

GW 21-132.  
GW 21-127.  
GW 21-133.